

私にとって「講義」とは

石隈利紀
心理学系教授

気がつけば12年

私が筑波大学に赴任したのが1990年の9月ですから、今秋でちょうど12年になります。その間、第二学群人間学類、教育研究科（学校教育コース、カウンセリングコース）、心理学研究科、人間総合科学研究科（ヒューマンケア専攻）で、講義をしてきました。私にとって講義は、筑波大学の教員としての仕事の中核です。私にとっての講義について、雑感を述べます。

私のアイデンティティ：先生

私は学生時代から「先生」でした。大学で落ちこぼれの私を支えたのは、家庭教師という仕事でした。そこで子どもから「先生」と呼ばれ、保護者からは報酬だけでなく、敬意やときにはごちそうまでもらいました。家庭教師の先生が、自分の原点です。企業（教育産業）に勤めたときは、顧客対象の研修の講師とし

て、いかに自社の商品（教材）を使うかを講義しました。企業を辞めてからは、一時塾を経営し、そのお金で（告白すると親の援助も得て）アメリカに勉強に行きました。アメリカでは大学で日本語を教えながら食いつなぎ、大学院の後半からは“Teaching Assistant”をしました。その後、アメリカの大学で教員をしてから、帰国しました。つまり、20歳代前半から52歳の今日まで、私は先生として生きてきたわけです。私にとって「先生」であることは、①私を必要とする人がいること、②講義をして食べていることを意味します。つまり私は、講義というヒューマンサービスを生業としているということです。

もう一つのアイデンティティ：スクールサイコロジスト（学校心理士）

私の専門は「学校心理学」です。私のアイデンティティは、児童生徒学生の学

校生活における問題状況の解決を援助する「スクールサイコジスト」(学校心理士)という専門職業人です。筑波大学では約6年間、保健管理センターの学生相談室のカウンセラーをしました。現在も、筑波大学心理・心身障害教育相談室の相談員として相談活動を行い、また附属学校の子どもの学校生活における苦戦に関して、子どもや先生をサポートしています。つまり私は、学校における問題解決の援助(広義でのスクールカウンセリング)というヒューマンサービスにおける実践家です。そして学校心理学やスクールカウンセリングの研究者です。

したがって、筑波大学における私の仕事は、教育(主として講義と論文指導、生活面での援助)、スクールカウンセリングの実践(教育相談室と附属学校での)、研究、そして大学運営の分担(組織人としての役割)となります。私の講義には、①将来あるいは現役のスクールサイコジスト、スクールカウンセラー、教師などにスクールカウンセリングの理論と技法を教える「職業教育」、②スクールカウンセリングや学校心理学についての基礎知識を提供する「教養教育」、そして③大学生の学校生活における問題解決を援助する「スクールカウンセリングの実践」の3つの側面がありま

す。もちろん授業科目によって、そのバランスが異なります。

私が担当する「カウンセリング心理学」

私が担当する、人間学類学生対象の「カウンセリング心理学」という科目での講義について、述べます。この科目は、年度によって異なりますが100名前後が受講します(大型授業ですので、非常勤講師の方が同じ授業を他学類対象に開いています。そこでも多数の受講生がいます)。この科目の目的は、①カウンセリングの主要理論およびカウンセリング実施上の諸問題を提示し解説し、討論することと、②カウンセリングについての知識を青年期の課題(進路決定、学業、人間関係、恋愛・セックスなど)への取り組みに生かす方法について提示し、その活用について解説することです。つまり私は、この科目で、職業教育の基礎と教養教育と同時に、スクールカウンセリングの実践(学生にとっては体験学習)を行っています。多くの学生は、学生生活のさまざまな問題で悩んでおり、自分の力や周りの援助で、自分の悩みに対処しています。ですからこの科目を通して、学生がカウンセリングに関する知識や技法を知ることで、自分を支えお互いに支え合う力を高めることを目

指しています。日本学生相談学会でも、授業を通じた開発的・予防的カウンセリングの意義は、繰り返し議論されています。さらに、将来教師やカウンセラーになる者は、「自分」が他者をサポートするという「仕事の道具」にもなり、自分という主体が揺さぶられることが多いので、自分を支える方法を知り、互いに支え合う方法を知ることが必要なのです。

実際「カウンセリング心理学」の受講生は、カウンセリングというヒューマンサービスへの関心、心理学への関心、そして同時に自分自身への関心が強いと言えます。これは青年期後期を過ごす大学生の特徴でもあります。

成績の評価

「カウンセリング心理学」の成績評価は、職業教育と教養教育という側面で期末テストを活用し、スクールカウンセリングの体験という側面では、毎回授業の最後にA5の用紙に書く「感想文」を活用しています。そしてレポートは、「本、漫画、舞台、映画などの作品について、①作品の概要、②カウンセリングの視点からの検討、③その検討結果を自分の人生と職業にどう生かすか」についてです。したがってレポートは、職業教育、教養教育、スクールカウンセリングの3

つの側面があります。私は、期末テスト、感想文、レポートの組合せで成績を評価してきましたが、スクールカウンセリングという体験的な学習の側面を含んでいるため、ABCDという評価をつけることが困難です。感想文は出すことで「合格」であり、レポートもきちんと議論されていれば、高い評価となります。

私の留意点

「カウンセリング心理学」で私が大切にしていることを述べます。

①学生とのコミュニケーション

学生が私の講義をどう理解し、どう受けとめているかを、私はできるだけ把握し、講義に反映したいと思っています。講義の後学生の感想文（質問や授業へのリクエストもある）を読むという日課は、私にとって大きな楽しみであり、次の講義への準備でもあります。また学生の感想文の一部を、次の授業で紹介し、学生のリクエストに応じています。私は、この授業を「ディスクジョッキー型授業」と勝手に名付けています。

②学生のメンタルヘルスへの影響

カウンセリングの理論と技法を学び、それを自分の学校生活での問題解決に生かすという作業は、苦戦のまっただ中にいる学生にとっては、負担になる可能性

があります。講義では、苦戦中の学生を想定して、講義が学生の苦戦を増幅しないように、できれば少しでも軽減するように、最大限気をつけています。また学生が私の講義で悩みが刺激されたり、悩みを解決する糸口を見つけたときは、私に声をかけたり、学生相談室を利用するよう勧めています。

③私の実践や研究成果の活用

講義において、スクールカウンセリングに関する私自身の実践や研究成果を生かすよう努力しています。しかし、自分の研究成果は小さなものなので、できるだけ先輩や仲間の研究成果を、学会誌や学会発表から学ぶようにしています。指導している学生や大学院生から学ぶことも多いです。その点、筑波大学には、心理学に限らず一流の研究者が多いので有利です。しかし、今日まで他の学系の先生方と関わる機会を十分持たずにきてしまったので、私が属する「人間総合科学研究科」には期待しています。

今回は、自分の講義についての雑感を、「カウンセリング心理学」という科目を材料に述べました。私の講義には、先生方の講義と重なるところも、少しカウンセリングの科目らしいところもあるかもしれません。今後は、教員もお互いの講義を見る機会が増えると楽しいだろ

うなと思っています。

学生にとって、楽しくて、今日の問題解決と明日の準備に役立つ講義をめざして、私もレベルアップしていきたいと思っています。

資料：私の授業の概要

(2学期集中、2/3限目)

- 第1回 オリエンテーション、カウンセリングとは、援助する・援助されるとは
- 第2回 カウンセリングにおける三種類の人間関係ー理解者として、味方として、人間として
- 第3回 発達を支えるカウンセリング、学校心理学、スクールカウンセラーの仕事
- 第4回 恋愛・セックスとカウンセリング、エイズ予防
- 第5回 進路とキャリアカウンセリング
- 第6回 カウンセリングプロセス
- 第7回 カウンセリングの主要理論
- 第8回 特別講義：

「フーテンの寅さんと釣りバカのハマちゃんに学ぶカウンセリング」

- 第9回 論理療法
- 第10回 チーム援助ーみんなが資源、みんなで支援

(いしくまとしのり 学校心理学)